

家康

上

池宮

Ikemiyā Shōichirō

彰一郎

遁
げ
る



永遁 康 上

江苏工业学院图书馆
藏书章

池宮
Ikemiya Shōichirō
彰一郎

に
適いげろ家康 上

一九九九年一月五日 第一刷発行

著者 池宮彰一郎
いけみやしょういちろう

発行者 岡本行正

発行所 朝日新聞社

〒104-8011 東京都中央区築地五―三―一

電話 〇三―三五四五―〇二三一 (代表)

編集・書籍編集部 販売・出版販売部

振替 〇〇―〇〇―七一―一七三〇

印刷所 凸版印刷

※定価はカバーに表示してあります

遁げろ家康 上◆目次

天機転回 5

跼天踏地 47

固歩艱難 99

意、自ら通ぜず

141

甲州崩潰 177

轍鮒の急 217

装丁 菊地信義
装画 徳川家康三方ヶ原戦役画像
(徳川美術館所蔵)

遁げろ家康
上

天機
轉
回

【てんきてんかい】造語

天の秘密、造化の機密。天の与える機会が、めぐり回ること

「人間五十年、下天の内をくらぶれば、夢まぼろしの如くなり。ひとたび生をうけ、滅せぬもののあるべきか」

幸若舞、敦盛の一節である。

幸若舞は、室町後期、桃井直詮（幼名・幸若丸）が、声明・平曲（平家物語を琵琶の伴奏で語る曲）等の曲節を採り入れ創始した曲舞の一種で、武家物語を謡い、勇壮な箇所で謡い手自身が舞い巡る。

下天とは下層の天、四王天を指す。四王天の一昼夜は人間界の五十年に当る。人間は五十年の間、生を受けても、下天の内では夢幻の一昼夜に等しく、やがて死を迎える。その儚さを虚無と観ずるか、自堕落に陥るか、はたまた他聞を憚らず思うが儘に飛躍を試みるかは、人の考えようひとつであろう。

永禄三年（一五六〇）五月十二日、駿河・遠江・三河の三カ国に尾張六郡を加えて所領百万石の今川三河守（新任）義元は、足利十三代將軍義輝の招請に応ず、と称して西方への軍旅を発向した。

総勢四万、実数は二万五千ほどであろう。当時一万石の動員兵力は二百五十程度であった。

義元は、後世にいうほど愚将ではない。西方への進出に周到だった。北の脅威、甲斐の武田信玄の長男義信に娘を嫁がせ新たな婚姻関係を結んだ（義元の正室は信玄の姉）。東の相模に威を張る北条氏康の子氏政には信玄の娘を嫁がせ、義元の長男氏真は氏康の娘を娶る。強力な三国同盟で後顧の憂いを断った。

上洛行の当面の敵は、西の隣国尾張の織田信長である。今川と織田は過去数代にわたって尾三国境で領分の争いを続けている。だが総力戦となれば兵力差は絶対である。信長の所領は尾張の半国（約二十万石）。動員兵力は四千ほどである。

義元の先鋒隊五千は西進し、五月十五日には三河の池鯉鮒（現・知立）に達し、十七日、尾張鳴海地方に進出した。

義元は、緒戦に慎重だった。五月十六日三河岡崎城に入ると、織田方の奇襲に備え、堀越義久の兵四千を池鯉鮒・今岡に配し、岡崎城を庵原元景に守らせ、十八日、本隊を尾張沓掛城に進めた。

尾張・三河の国境地帯は、多年の攻防で敵味方の城砦が輻輳している。織田方の三河刈谷城には被官の水野信元が孤塁を守っている。今川方で突出しているのが尾張鳴海城（岡部元信）で、その南方の尾張大高城（鵜殿長照・長持の親子）との間に、織田方の佐久間大学助盛重が割りこんで、丸根・鷲津（飯尾遠江守ほか）の両砦を頑強に守っている。

義元はまず前線の整理を命じた。街道筋を離れ南に孤立している敵方の刈谷城は打ち棄ててよいが、丸根・鷲津の両砦は街道に近く、鳴海城の煩いである。だが本隊を用いるほどの敵勢ではない。

義元は属将を使うことにした。戦上手の松平元康（後の家康）に二千五百の兵を与え、丸根砦を、また朝比奈泰能の二千に鷺津砦の攻略を、それぞれに命じた。

その情報が織田信長の本城清洲に齎されたのは、十八日の夜であった。

尾張沓掛城は、織田家の被官梁田政綱の持ち城であったが、数年前に今川勢の尾張侵略に抗しきれず、城も所領も奪われた。政綱は他日の捲土重来を期し、養いおいた多くの諜者や物見を配して、諜報網を張りめぐらせておいた。

（義元本隊沓掛城にあり、十八日丸根・鷺津両砦の攻略するのを待つて、翌十九日、大高へ進発する見込み）

『甫庵太閤記』など俗書によれば、その夜清洲で軍議が開かれ、守旧派の老臣は籠城を提議したが、信長は鳴海表に打って出て、義元的首を刎ねるか討死するかだと宣言したとあるが、恐らく後世の偽筆であろう。信長という男は、軍議を開くほど重臣を信倚していなかったし、重臣も二十七歳の信長を、"うつけもの"としかみていなかったようである。

信長は危急に怯えて集まった重臣どもを、世間話などで紛らわし追い帰すと、ひとり深更まで眠った。

夜半過ぎ、突然起きあがった信長は、出陣を令し、素早く鎧を着け、湯漬を食らい、牀几に腰掛けて鼓を打ち、冒頭の幸若舞を三度まで謡い舞った。

舞い終ると、用意させた馬に跨り、小姓七、八騎を従えて城門を出た。門外に控えていた三百ほどの将兵が続いたが、夜明け方、熱田神宮に達した頃には、呼集に応じて馳せ参じた兵力は、

千八百ほどになっていた。

信長が、夜半に意を決し、幸若舞で自らを鼓舞した方略とは、どのようなものであつただろうか。籠城は愚である。援軍の見込みのない籠城は成立しない。

出撃しても、四千ほどの軍勢から清洲をはじめ各城各砦に最低の備えを割けば、実動兵力は二千そこそこである。二万五千の軍勢に囲われた義元を討つなど夢まぼろしである。

一縷の望みは、梁田政綱の諜報網だった。今川軍の動きが刻々と、手にとるようにわかる。予測も的確である。

——遊撃戦しかない。

今川軍は、難なく尾張領を踏み潰してゆくだろう。その先の敵は北の美濃の斎藤か、西の伊勢の北畠か、いずれにしても補給路が延びる。その隙を衝く。尾張から三河の山中にひそみ、諜報網を活用して、補給の弱点を襲い、強敵を避ける。今川軍の衰弱を待って一挙に尾張領回復の一戦を試みる。

だが、難点が一つある。陸な抵抗もなしに尾三の山中に遯竄すれば、家来はあるじを弱しと見限って離散し、敵に降る。戦国の世の常である。

——まず、一勝を挙げて、士気を昂揚しなければ……。

信長は、その意図を秘匿するため、擬勢を張った。熱田の町民に命じてあらん限りの旗や幟を町なかや森に立てさせた。足りなければ紙の幟や筵旗でもよい。信長の本隊が熱田に滞陣しているように見せかけるためだった。

當時は、伊勢湾が深く入りこみ、熱田は海に面し、街道は海沿いに通っている。鷺津砦や大高城は湾曲した海岸の彼方に見えた。

信長の軍勢が南に進み、上知我麻^{かちかま}祠^{ほこら}にさしかかった頃、遙かに鷺津・丸根の方角に黒煙の上がるのが見えた。信長は更に敵の目をくらすため、鳴海方面に佐々正次ら三百の決死の兵を出し、浜辺を離れ迂回した。

熱田・鳴海の間にある山崎城を過ぎる頃、丸根砦の佐久間大学助の戦死と、両砦の陥落が伝わった。

「大学、はや逝くか。われも間もなく後を追うぞ」

信長は悲壮な言葉を吐いて全軍を奮いたたせた。

行軍の途中、各城砦の兵を収めたため、善照^{ぜんしやうじ}寺砦に着いたときは全軍は三千ほどにふくれ上がった。敵の鳴海城は指呼の間にある。熱田から二里半（約十キロ）、ゆるやかな行軍であったのは、この日稀にみる猛暑であったためである。灼^やくが如き炎熱に将も兵も喘^{あえ}ぎ苦しんだ。土地の事情に通じた者が絶えず水を給しなかったら堪えられなかったであろう。

（義元の本隊、大高城に向かって移動中）

の諜報が届いた。

信長は、鳴海城の牽制に約一千の兵を割き、残る二千の兵を率いてまたも迂回策を採り、東の相原に向かって進発した。

——義元本隊も、この酷熱に苦しんでいるよう。あるいは奇襲の機があるかも知れぬ。

それが淡い期待であった。

その頃、沓掛から大高への道を行軍中の義元本隊は、大沢村で突然道を変えた。桶狭間から更に道を変え、田楽狭間を通つて長福寺で元の大高道に出る。いささか遠廻りだが理由はわからない。給水のためか、あるいは炎暑を凌ぐ休息の場所選びか、いずれにせよその変更は天運の転回となつた。

田楽狭間で本隊は停止し、昼食を兼ねた長い休息をとつた。

その情報は、時を移さず信長本隊に竄された。信長本隊は桶狭間の北西一里足らず（約三キロ）の相原付近を秘匿行動中であつたから、諜報伝達の速さには驚くほかはない。今川方も多くの物見を派していたにも拘らず、約二千の信長隊を発見できなかったことも謎である。

信長は、瞬時に勝機を感じとつた。山あいの狭間道を通る大軍の隊列は、必然縦に伸びきる。その狭間の中間で休息をとる本陣の防衛兵力は寡少にならざるを得ない。

——今川軍の行旅は隙だらけである。その隙を衝けば勝てるかも知れない。

信長本隊は疾走を開始した。うねり続く低い山陵に道はない。茨をかき分け溪流を蹴散らし、無二無三に斜面を駆け登り馳せ降る。遅れる者は打ち捨てて突進した。

暑熱が頂点に達した頃から西の空に黒雲が湧き、みるみる天空を覆つた。颯と風が起つて大粒の雨が音を立てて降り出す。風雨は滝の如く渦巻き叩きつける。

休息中の今川本陣はたちまち大混乱に陥つた。食事を抛り出し、刀槍弓矢を放置して、風雨を避けようと逃げまどつた。

雷光と、雷鳴と、豪雨。田楽狭間の小さな平地は怒号と叫喚の渦と化した。

誰か一人、背後の丘陵を見返る余裕があったら、悪夢かと眼を疑っただろう。その丘の背にみる間に現れた真つ黒な軍勢が、刀槍を閃かせ鯨波の如く攻め下つて来た。

「すわ何やつ！」

「寝返りか？」

「裏切り者が現れたぞ！」

そう錯覚したのも無理はなかった。天から降つたか地から湧いたか、この地に織田勢が突如出現するなど予想だにしない。

「かかれーっ！ たんだ、かかれーっ！」

たんだ、とは「只」の強調で、功名首は無用の意である。

「たんだ、たんだかかれーっ！」

将兵は刀槍を翳し、突く、断つ、ぶっ叩く。噴出する血潮と共に、首が手足が飛び散る。

織田勢は、狭い平地に荒れ狂った。

田楽狭間は阿鼻叫喚の地獄図絵と化した。

今晩、激戦のあつた丸根砦は、昼を過ぎると倦怠に墮していた。

昨夜、宵のうちに大高城を発した松平元康の手勢二千五百は、夜半過ぎまでに織田方丸根砦近くに寄せて、包囲陣形をとり、丑ノ下刻（午前三時頃）、関を挙げて攻めかかった。

守る織田方の佐久間大学助盛重は、聞えた勇将である。隣する鷲津砦は要害の地だが、丸根砦は地形に恵まれない。佐久間盛重は鷲津を友軍の飯尾遠江守五百二十に譲って、自らは四百の手

勢で丸根の守備に就いていた。

激戦は二刻ふたとき（約四時間）あまり続いた。今川方朝比奈泰能二千に攻めたてられた鷲津砦がまず陥ちた。続いて丸根砦が六倍を超える松平元康勢の猛攻に屈した。飯尾も佐久間も討死、砦は炎に包まれた。

戦が終わると勝報と敵将佐久間盛重・飯尾遠江守の首級は、沓掛城を発し行軍中の義元の許へ届けられた。

松平勢は休む間もなく大高城に帰り、城の修復に忙殺された。

昼前、半里（約二キロ）ほど北の鳴海城から知らせがあつた。眼と鼻の先の織田方善照寺砦に約一千の兵が増強された模様とある。織田方の逆襲に備えて、大高城は緊張した。

だが、善照寺砦は一向に動きを示さない。

前夜からの徹夜と戦の疲労、加えるに凄まじい暑熱に、大高城は倦怠の色が隠せない。

「こらッ、居眠ってはいかん！　しっかりせい！　戦はまだ始まったばかりだぞ！」

防柵の根方に坐りこんだ槍衆は、例外なく居眠っていた。その一人一人を叩き起して歩くのは、松平勢の侍大将石川与七郎数正である。石川数正は天文十八年（二五四九）松平竹千代（元康）が今川義元の人質となった時から、選ばれて駿府に赴き、近習として仕えた。元康十七歳の初陣をはじめ、大高城兵糧入れの時など、常に戦陣にあつて侍大将を務めている。

数正は、本丸の直轄軍の見廻りを終えたと、出丸の木立に足を運んだ。三カ所の出丸はすべて今川家の寄騎よきの軍勢である。

松平元康の直轄軍は、旧領岡崎領で招集した八百に過ぎない。あとの千七百は三河・遠江で集